研　究　報　告

令和　７　年　４　月　２３日

公益財団法人　前田記念工学振興財団

理 事 長　　岸　　利 治　　殿

研究代表者

所　属　：　　長崎総合科学大学

氏　名　：　　山田由香里

研究課題名：　　長崎の教会堂をつくった棟梁たちの、その後の活躍
～カトリック福岡教区所蔵資料の調査研究

助成金額：　　１００万円

研究実施期間：自　令和６年４月１日　～　　至　令和７年３月３１日

研究報告　令和６年度　建築分野 No.15

長崎の教会堂をつくった棟梁たちの、その後の活躍
～カトリック福岡教区所蔵資料の調査研究

Post-Construction Activities of the Architects of Churches in Nagasaki

: A Study of Materials Held by the Catholic Diocese of Fukuoka

長崎総合科学大学　教授　山田由香里

（研究計画ないし研究手法の概略）

本研究は、カトリック福岡教区（福岡・佐賀・熊本県域、1927 年に長崎教区から分離設立）所蔵の教会堂建設資料（1929-1938、以下福岡教区資料と略記）などの調査研究を通じて、長崎の教会堂をつくった棟梁たちのその後の活躍を明らかにするものである。2018 年に世界遺産登録を受けた「長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の調査で、鉄川与助（1879-1976）の活躍については建築遺構から論じられた。しかし、もうひとりの棟梁・川原家の活躍や、長崎の教会堂建設が落ち着いた 1930 年以降の活動は空白であった。

研究計画は、⑴棟梁・川原家が手掛けた教会堂の整理、⑵北九州と大牟田で、川原正治と鉄川与助が手掛けた教会堂の資料分析と現地調査、⑶川原正治が 1941～46 年に台湾で手掛けた教会堂の現地調査、⑷長崎・中町教会堂の戦後復興、⑸展覧会「長崎の教会堂棟梁、その後の活躍」開催、からなる。福岡教区資料は、2017 年に共同研究者の福島綾子氏が見出し、3 千点の資料について整理が行われてきた。本研究も福島氏を代表とするカトリック福岡教区資料研究会の協力を得た。

（実験調査によって得られた新しい知見）

（１）棟梁・川原家が手掛けた教会堂

大工棟梁の川原家は、黒崎の出身で、初代：久米吉・1819～1903、２代：忠蔵・1861～1939、

図１　棟梁・川原家が手掛けた教会堂位置図

３代兄：正治・1891～1969、３代弟：伝次郎・1897～1982、3 代義弟：大石政吉・1895～1950 と続いた。図１は、手掛けた教会堂を地図に示した。

初代は大浦天主堂の建設に関わり、弾圧も受けた。禁教令が解けた後は、初期木造教会堂を手掛けた。今回、旧紐差教会堂（1929 年に正治によって移築され馬渡島教会堂に）の古写真（図２）が見つかった。久米吉が手掛けた江袋教会堂に酷似する。旧紐差教会堂も久米吉の可能性がある。２代はレンガ造教会堂を手掛けた。３代は戦前は北九州と台湾の教会堂、戦後は中町教会堂の復興を手掛けた。川原家の手掛けた教会堂は、外観を大きな切妻屋根とし、玄関を突き出し、木造かレンガ造で、レンガ積みを外観に見せる。内部は三廊式で、半円アーチのリブ・ヴォールト天井とし、天井は板張りでペンキ塗。黒崎教会堂（1920）が代表作である。墓所は黒崎教会の共同墓地の頂上にある。今回、御子孫が墓所を整備するにあたり、説明看板を設置した。

（２）北九州と大牟田で、川原正治と鉄川与助が手掛けた教会堂

『北九州市史』によると明治 20 年（1887)、エミール・ラゲ神父と島田喜蔵神父が小倉に赴任し、長崎からの信者の司牧にあたった。官営八幡製鉄所の建設が明治 24 年に始まり、信者は近代工業の地に仕事を求めての移住だった。1927 年の福岡教区の設立に伴い、信者が増えた教会堂は建て替えられた。しかし、建設後 10 年で戦災や災害で失われた。

①門司教会堂（正治、1930-1953、北九州市門司区広石）　関門海峡に臨む風師山中腹にあった。細長い敷地に、教会堂は入口を西に向け、正面中央に高さ 19ｍの塔を備えた。会堂部は単層切妻屋根で、梁間 4.5 間、桁行 10.5 間、室内は単廊式で中央部を高くした折上天井であった。小尖塔、軒回りのロンバルディア帯と十字飾り、ドーマー屋根等、華やかな外観をもつ。高い塔は、海峡を行き交う船や門司港駅から目印となった。要塞地帯法の制限を受け、古写真では背景が白く消されている。建物は、1953 年の水害で失われた。正治は、門司教会堂を見た津和野教会の信者の依頼を受け、1931 年に津和野教会堂を完成させた。

②新田原教会堂（正治、1933-1995、行橋市東徳永）　新田原は、明治の鉄道敷設に伴って果物を遠方に出荷できるようになり、果樹栽培が盛んになった。仕事を求めて、上五島や細石流の信者が移り住んだ。敷地には墓地、教会堂、司祭館、伝道館が並んだ。教会堂は正面に塔を持ち、会堂部は梁間 5 間、奥行き 15 間、室内は折上天井であった。外壁は下見板貼りで、正面は塔の部分を出っ張らせ意匠のポイントとする。教会は果樹園の中にあり、塔は地

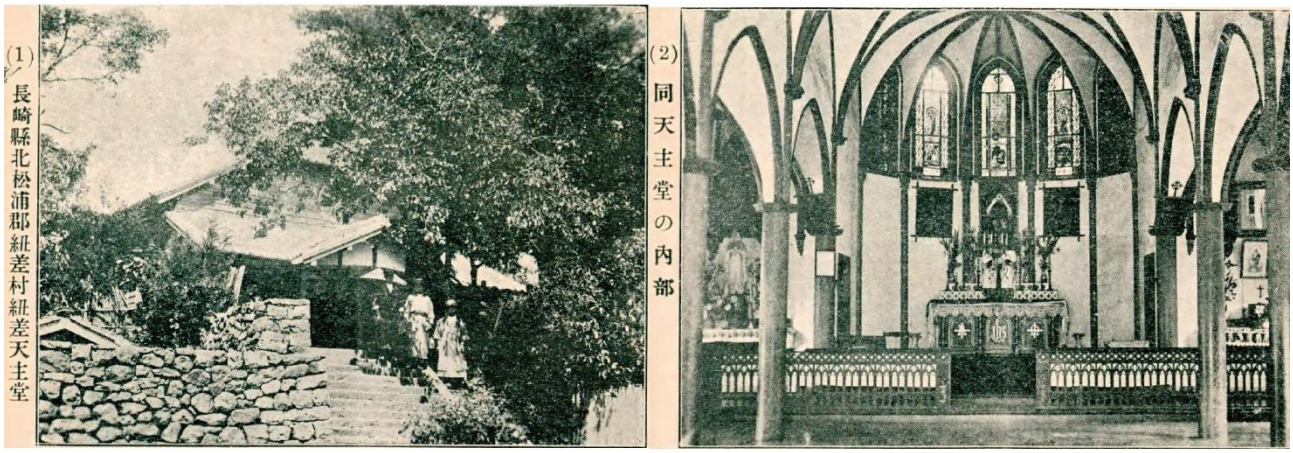


図２　旧紐差教会堂　外観・内観写真、1885、川原久米吉と推定、1929 年に馬渡島に移築、現在の馬渡島教会堂（『声』(323), 聲社, 1904-11. 国立国会図書館デジタルコレクション）

域の目印だった。1975 年に新聖堂ができた後は集会場として使われ、1995 年まで存続した。

③小倉教会堂（鉄川、1934～1945、小倉市三萩野）　小倉駅から駅前通りを 1.3 ㎞南に進んだ西側に位置する。建物は木造３廊式で、梁間 11 尺、奥行 30 尺、リブ・ヴォールト天井だった。立面は同時期に手掛けた天草の崎津教会堂（1934）に似る。外観は石張り風に目地を切り、小尖塔、ユリ花飾りを模した彫刻をつける。教会堂が面する道路は、以前は路面電車が走り、人の目に留まる外観だった。終戦直前に建物疎開のために取り壊された。

④八幡教会堂（正治、1934-1945、北九州市八幡東区天神町）　敷地に、教会堂、司祭館、伝道館（旧教会堂）があった。正面外観は津和野教会堂によく似て、イエズス会の太陽の紋章をつけた。建物規模は梁間 36 尺、奥行 93 尺だった。1945 年 8 月の空襲で失われた。

⑤戸畑教会堂（大石政吉、1935-1944、北九州市戸畑区千防）　正治の弟子で義弟の大石政吉が手掛けた。切妻造で玄関を突き出す外観、折上天井の手法が踏襲された。規模は梁間 4.5 間、奥行 9 間で塔は設けない。1944 年に陸軍に接収され、高射砲基地となった。

⑥大牟田教会堂（大石政吉、1936-1945、大牟田市曙町）　大牟田市庁舎の北東に位置した。戸畑教会堂とよく似る。規模は、梁間 8ｍ、奥行 19ｍ。玄関の上はベランダ状。教会堂の背後には、２階建の司祭館が付属した。1945 年の空襲で失われた。

（３）川原正治が 1941～46 年に台湾で手掛けた教会堂

川原家の御子孫によると、正治は 1940 年代前半に古川重吉神父に伴って台湾でレンガ造の教会堂を 2 棟手掛けたという。

1941 年から 1946 年の里脇浅次郎神父と古川重吉神父の台湾での記録は、「台湾天主教史上的里脇浅次郎與凃敏正」(『台湾天主教史研究論集』古偉瀛、2008)、「凃敏正神父日記」(『台湾天主教史料彙編』（前同）が詳しい。神父らの動きをたどると以下のようになる。

1941/5/22・里脇神父台湾到着。7/2・台湾教区長に就任、樺山教会で休息。7/6・蓬莱町教会で着座礼拝。7/10～12・台中、斗六、台南などを視察して高雄到着。1941/7/15・凃神父、万金教会主任司祭に。12/10・高雄教会が日本軍に強制占領、1942/1/30・古川重吉神父が到着、台北に着任。1944/10/25・万金教会の聖堂・神父宿舎・男女説教場が日本軍によって強制移設。1944/12/1・里脇教区長応召。1945/1・入営、高雄航空隊・特別警備工兵隊の衛生兵。1945/5・松山航空隊に転属。8/15 終戦。1945/9/20・日本軍が万金教会から退出。1945/9/25・里脇神父除隊、高雄教会・神学校の修復に専念。1946/4/3・凃敏正神父を代理司教に任命。4/5・里脇教区長帰国、宇品に上陸し、4/14 に長崎大浦の司教館に落着く。4/15・古川神父帰国、黒崎で休養。

これによると、里脇神父は高雄を拠点とし、台北を任せるために古川神父を長崎から呼び寄せた。1941～1946 年に、新しい教会施設の建設はなく、正治が関わるとすると、1945 年 9 月 25 日の里脇神父が除役後、帰国までのあいだに高雄教会を修復したように、戦後の復興であろう。携わった 2 棟の教会堂は、里脇神父がいた高雄教会堂（1931、図３）と、台北の日本人町に建設された樺山天主堂（1929、図４）の修復の可能性が高い。

高雄教会堂は、台湾布教を担ったドミニコ会スペイン人宣教師が、1859 年に最初に台湾で建てた教会である。現在の教会堂は、正面中央に鐘塔がそびえ、両脇には階段の衛塔をもつ。開口部は正面も側面も半円アーチを用いる。内部は三廊式、天井はリブ・ヴォールト天井で、板張りでペンキを塗る。内部立面中段のトリフォリウムは、人が登れ、手摺りが続く。

樺山天主堂は、現在のビルに入る 1984 年までレンガ造の教会堂だった。敷地は忠孝西路

と紹興南街の交差する南東角地で、教会堂は切妻造り、屋根にはドーマー窓がつき、塔が北面の東寄りにあった。教会に、レンガ造教会時代の資料がないか尋ねたところ、祭壇と洗礼盤が残るという。祭壇は木製で、尖塔をもつゴシック様式で、下段には中央に聖心を浮き彫りにし、半円アーチの中に葡萄と麦穂を並べる。洗礼盤も木製で、蓋には十字架と麦の穂がつき、側面には 4 枚花弁の花のモチーフがつく。台湾では他にないモチーフだそうで、長崎の椿のモチーフに一致する。

戦時中、台湾教区は、里脇神父と古川神父、台湾人司祭 3 人、スペイン人司祭 14 人、合計 17 人の司祭で、27 教会と 13 仮設礼拝堂を維持した。特に高雄教会堂は、内部が板貼り・ペンキ塗りのリブ･ヴォールト天井で、正治の戦災復興の関わりを強く感じた。正治は、1950-51 年の長崎中町教会の戦後復興に携わるが、台湾時代にそれが始まった。

（４）長崎・中町教会堂の戦後復興

台湾から長崎に戻った川原正治は、原爆の延焼で焼損した中町教会堂の再建に取り掛かる。これも、古川重吉神父との協働である。中町教会堂は、大浦天主堂の次に長崎の市街地に建てられた教会堂で、日本人信者のために 1897 年に建設された。設計は東京大司教区のパピノ神父で、大司教はオズーフ神父であった。平面は内陣が広く、周歩廊を持っていた（檜皮拓也氏『長崎・西中町天主堂の復元研究』2022 年度京都工芸繊維大学卒業論文）。長崎に同じ平面の教会堂は他になかった。同じ平面は、1910 年建設の函館元町教会堂の当初平面に見られる。三宅理一博士らの研究によって、元町教会堂の設計はオズーフ神父であり、いわばオズーフスタイルである（三宅理一･他編著、函館カトリック元町教会調査報告書、2024 年）。

中町教会堂は、1897 年建設のレンガ壁を活かして 1951 年に復旧した。復旧工事の写真がカナダに残ることを、ノースウェスタン大学の宮崎広和博士から御教示を得た（『二つの教

図３　高雄教会堂外観（上）と内観

図４　樺山教会堂（上）と、祭壇・洗礼盤（下）

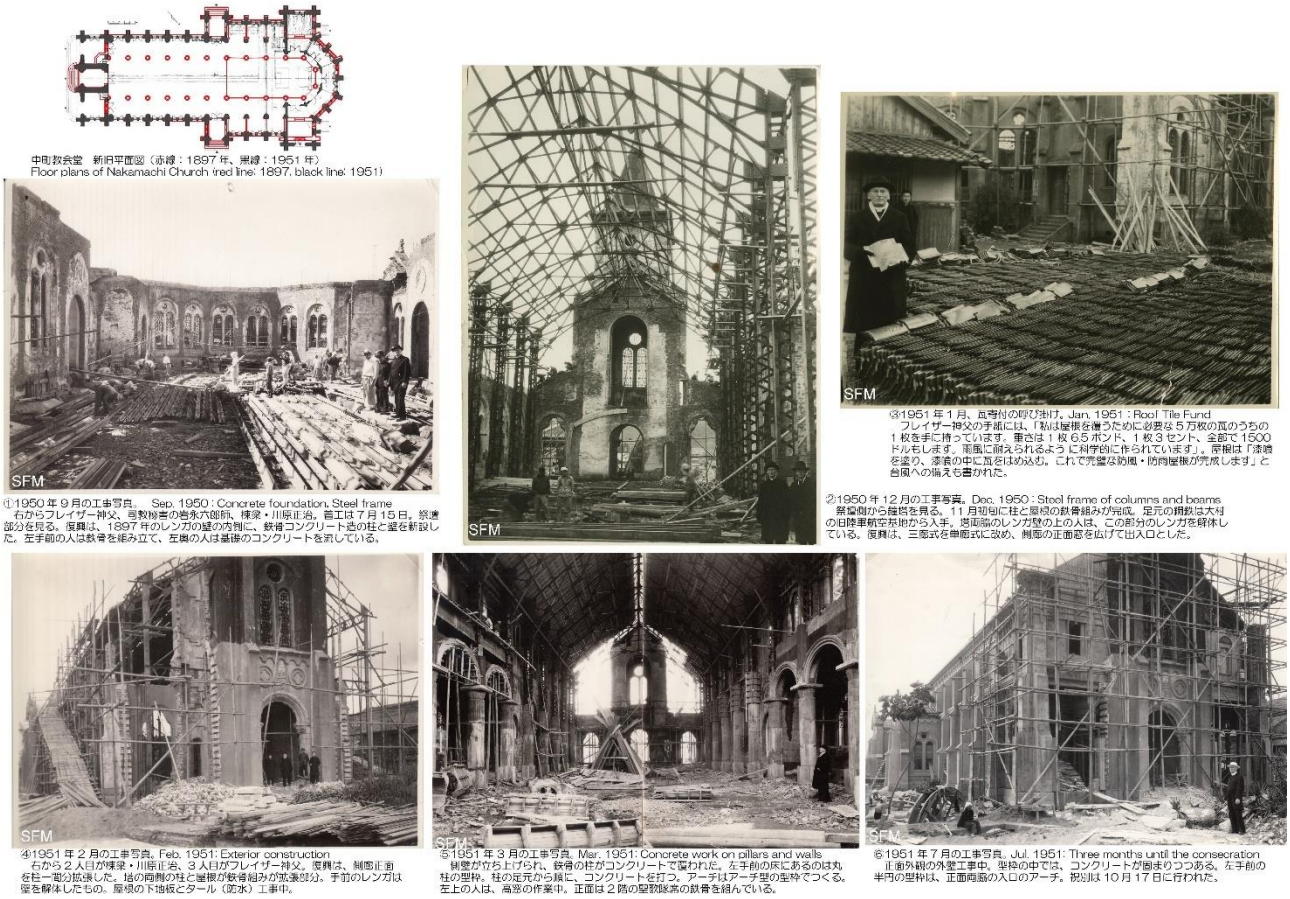
会の物語―カトリックの原爆遺構・再建資金調達・太平洋横断的関係―』2024 年)。宮崎博士によると、カナダ・スカボロ外国宣教会のジョン・M・フレイザー神父が、北米の支援者に寄付を募るために撮影した写真だという。そこに棟梁・川原正治が写っていた。工事は、1950 年 9～12 月・鉄骨組立とコンクリート基礎工事、1951 年 1 月・瓦寄付の呼掛け、2 月・屋根の下地と防水工事、正面の拡張工事、 3 月・内部のコンクリート工事、7 月・外壁仕上げと進められた(図５)。フレイザー神父が 1950～51 年に集めた募金は、再建費の 40%、$15,300 にのぼった(総工費は約 1,600 万円、$38,095)。福島氏がトロントで写真調査を実施した。

（５）展覧会「長崎の教会堂棟梁、その後の活躍」開催

以上の成果を一般に周知する展覧会「長崎の教会堂棟梁、その後の活躍―川原正治・鉄川与助」をナガサキピースミュージアムで開催した（2025 年 2 月 26 日～3 月 23 日、図６）。会期中は、500 名の入場者を得た。

（１）～（４）を通じて、長崎の教会堂をつくった棟梁たちのその後の活躍は、戦後 80 年を意識させることに気づかされた。北九州・大牟田の教会堂は、近代工業都市の興隆とともに建設された。だからこそ戦災を受けた。同様に、台湾の教会堂も戦災を受けた。川原正治が手掛けた教会堂の復興は、台湾に始まり、中町教会堂に続いた。

期間中、フランスから Dr Sylvie Morishita の訪問を受け、展示の一部は 2025 年 10 月 30 日～11 月 17 日にパリ 15 区で開催される展覧会「Nagasaki Aug. 1945 11:02am - the art of peace」で紹介されることになった。Dr Morishita によると、近代工業都市の教会堂建設は、フランスではミシュランの工場周辺で見られたという。



中町教会堂　新旧平面図（赤線：1897 年、黒線：1951 年）
Floor plans of Nakamachi Church (red line: 1897, black line: 1951)

①1950 年 9 月の工事写真。 Sep. 1950：Concrete foundation, Steel frame
右からフレイザー神父、司教秘書の岩永六郎師、棟梁・川原正治。着工は 7 月 15 日。祭壇部分を見る。復興は、1897 年のレンガの壁の内側に、鉄骨コンクリート造の柱と壁を新設した。左手前の人は鉄筋を組み立て、左奥の人は基礎のコンクリートを流している。

②1950 年 12 月の工事写真。Dec. 1950：Steel frame of columns and beams
祭壇側から身廊を見る。 11 月初旬に柱と屋根の鉄骨組みが完成。足元の瓦は大村の旧陸軍航空基地から入手。奥正面のレンガ壁の上の人は、この部分のレンガを解体している。復興は、三廊式を単廊式に改め、側廊の正面窓を広げて出入口とした。

③1951 年 1 月、瓦寄付の呼び掛け。Jan. 1951：Roof Tile Fund
フレイザー神父の手紙には、「私は屋根を覆うために必要な 5 万枚の瓦のうちの 1 枚を手に持っています。重さは 1 枚 6.5 ポンド、1 枚 3 セント、全部で 1500 ドルもします。雨風に耐えられるように科学的に作られています」。原根は「漆喰を塗り、漆喰の中に瓦をはめ込む。これで完璧な防風・防雨屋根が完成します」と台風への備えも書かれた。

④1951 年 2 月の工事写真。Feb. 1951：Exterior construction
右から 2 人目が棟梁・川原正治、3 人目がフレイザー神父。復興は、側廊正面を柱一間分拡張した。塔の両側の柱と屋根が鉄骨組みが拡張部分。手前のレンガは壁を解体したもの。屋根の下地板とタール（防水）工事中。

⑤1951 年 3 月の工事写真。Mar. 1951：Concrete work on pillars and walls
側壁が立ち上げられ、鉄骨の柱がコンクリートで覆われた。左手前の床にあるのは丸柱の型枠。柱の足元から順に、コンクリートを打つ。アーチはアーチ型の型枠でつくる。左上の人は、高所の作業中。正面は 2 階の聖歌隊席の鉄骨を組んでいる。

⑥1951 年 7 月の工事写真。Jul. 1951：Three months until the consecration
正面外観の外壁工事中。型枠の中では、コンクリートが固まりつつある。左手前の半円の型枠は、正面両脇の入口のアーチ。祝別は 10 月 17 日に行われた。

図５　中町教会堂の復興工事写真

（トロントのセント・マイケルズ・カレッジ大学のジョン・M・ケリー図書館所蔵）

（６）おわりに

今回の研究を通じて、長崎の棟梁がその後展開した教会堂の意匠・構造、司祭と棟梁の協働、昭和初期の北部九州の商工業化とともに展開した教会施設、都市や社会情勢との関係を読み解くことができた。これには、福岡教区資料が重要な役割を果たした。改めて、福岡教区資料が貴重な資料であることを強調したい。

カトリック福岡教区は、2027 年に教区設立 100 周年を迎える。それに向けて、今後も調査研究を続ける予定である。本研究にあたり、お力添えを得た諸氏に感謝申し上げます。

（ 発 表 論 文 ）

- 山田由香里「長崎のカトリック教会群」函館カトリック元町教会シンポジウム、2024 年 5 月 18 日
- 山田「長崎の教会堂建築～フランス人神父と日本人大工」神奈川大学非文字資料研究センター／租界・居留地班　第 89 回研究会、2024 年 10 月 7 日
- 山田、展覧会「長崎の教会堂棟梁、その後の活躍―川原正治・鉄川与助」ナガサキピースミュージアム、2025 年 2 月 26 日～3 月 23 日
- 山田「長崎のカトリック教会群」『特集　元町天主堂－畳座ゴシック聖堂はいかにして生まれたのか？・日仏工業技術』第 70 巻第 1＋2 号、2025 年 3 月、日仏工業技術会
- 山田「台湾カトリック教会堂－里脇浅次郎神父、古川重吉神父、大工・川原正治」『長崎総合科学大学地域科学研究所紀要・地域論叢』No.40、2025 年 3 月

図６　展覧会「長崎の教会堂棟梁、その後の活躍―川原正治・鉄川与助」会場写真